



画面タッチ 仮設の安心

宮城 お年寄りに端末配布

東日本大震災で被災して仮設住宅で暮らすお年寄りたちを、タブレット端末で見守る試みが宮城県で始まった。写真、小宮路勝撮影。全国介護者支援協議会（全介協）とKDDIが協力し、将来は被災3県に広げたい考えだ。

「画面にタッチしてください。相談員と話すこともできます」。20日、宮城県名取市の仮設住宅で配られた端末を前に、玉田実さん（70）夫婦に全介協職員が話しかけた。

端末にはA4判ほどの画面に非常事態を伝える「緊急！」の表示があり、触れると緊急通報ができる。東京にある全介協事務所職員と話ができる「きずな談話室」もある。

妻のヨシ子さん（68）は「急に具合が悪くなることがあるので助かります」。自治会長の高橋善夫さん（68）は「孤独死を防ぐ一つになれば」と語る。

当面は東京で全介協職員が午前10時～午後4時に相談員を務め、緊急時に救急隊などに連絡する。

石巻市や南三陸町の仮設住宅にも8台を設置し、10月に気仙沼、岩沼両市に広げる。全介協の上原喜光理事長（64）は「将来は1万世帯に広げたい」と話す。

（平間真太郎、鈴木剛志）